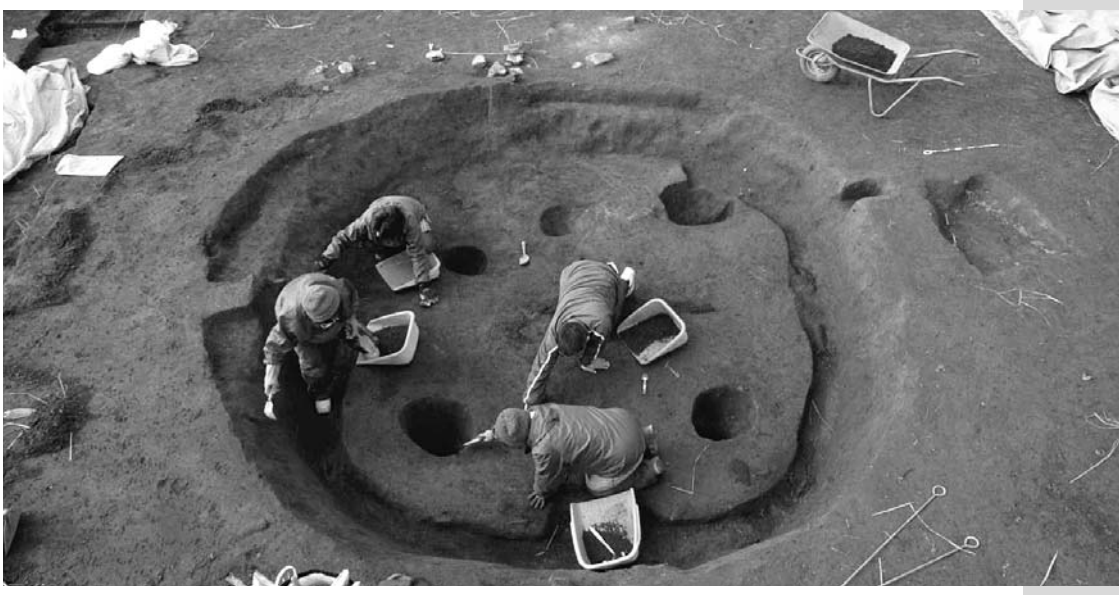


／ 笛 吹 市 探 訪 ／

第50回

笛吹市の史跡⑨ 一の沢遺跡



発掘調査の様子

今回の笛吹市探訪では、平成21年1月から3月にかけて、境川町小黒坂地内で行われた一の沢遺跡の発掘調査の成果を報告します。

一の沢遺跡は、これまでも境川町小黒坂を中心に広がる遺跡で、旧境川村・笛吹市・山梨県の各教育委員会により、過去数回発掘調査が行われています。

特に、この遺跡は縄文時代の遺跡として知られていて、一の沢遺跡四号住居跡から出土した土器群は、国の重要文化財にも指定され、山梨県考古学博物館に展示されています。また、古墳も数多く、そのうちのいくつかは現在でもその姿を見ることが出来ます。

さて、今回の発掘調査では、今から約4500年前縄文時代中期の竪穴(たてあな)式住居が13棟、古墳が1基確認されました。それぞれの住居跡からは、うず巻きや波などをモチーフにした文様(もんよう)がほどこされた土器が出土しています。これらの土器は、「曾利式」として分類されている一群に含まれ、山梨県や長野県諏訪地方の遺跡でよく見られるものです。また、約4200年前の土偶や黒耀石(こくよくせき)と呼ばれるガラス質の石で作られた矢じりも発見されています。

この当時の住居は、直径数メートルの円

形の穴を掘り、その底を平らにして土間にしています。土間には直径数十センチメートル、深さ50センチメートルから1メートル以上の数本の柱穴が掘られた跡が残っています。土間の中心付近には大きな石で囲まれた炉が造られています。炉の中には真っ赤に焼けた土がたまっていて、ここが日常生活の中で煮炊きに使われていたことが分かります。

また、家の入り口付近にはほぼ完全な形をした土器が埋められていました。この土器は、死産の子を埋葬したのだとも言われています。母親が毎日、土器の上をまたぐことで、死んだ子供の魂が母親の胎内に戻っていくことを望んだのでしょうか。市内の別の遺跡では、埋められた土器の脇に土でできた鈴が供えられていた例が見つかっています。

さて、今回の一の沢遺跡の発掘調査では、地元、境川町の方にも作業を手伝っていたきました。参加者は、土の中から大きな土器が出てくるたびに歓声をあげ、その土器を掘り出すところをみんなで見守るなど和やかな雰囲気の中で作業が進められました。「その日の発掘作業の成果を話題に、家族や孫と楽しいひと時が過ごせた」と話していた参加者もいらっしやいました。皆さんも、発掘調査に参加してみませんか。



一の沢遺跡から出土した土器